

「新しい東北」官民連携推進協議会
令和4年度 福島県意見交換会（第2回）議事概要

令和4年10月20日
「新しい東北」官民連携推進協議会事務局

【日 時】令和4年10月20日（木）14:30～16:30

【場 所】Jヴィレッジ／オンライン

【出席者】（敬称略）

＜副代表団体＞（所属の五十音順）

株式会社東邦銀行／福島県／国立大学法人 福島大学／一般社団法人 ふくしま連携復興センター

＜主団体＞

株式会社Jヴィレッジ

＜復興庁＞

復興庁 復興知見班／復興庁 福島復興局

＜事務局＞

株式会社JTB

【議事概要】

1 開会

復興庁より、第1回意見交換会から第2回意見交換会までの間に副代表団体の皆様にいただいた意見を踏まえて事務局案を作成させていただいたが、忌憚なく活発な議論をお願いしたい旨、挨拶した。

2 各団体の活動紹介

国立大学法人福島大学より、取組資料（資料2-1、2-2）をもとに取組を紹介した。

3 令和4年度の実践の場企画案について

令和4年度実践の場の具体案について、資料1に沿って事務局より説明した。

4 意見交換

(1) 実践の場（第0回サミット）実施にあたり、目的の再確認／実践の場の内容案（テーマ案・プログラム内容・記者発表内容）に関する検討

記者発表の内容とそれに伴う実践の場での議論内容は、事務局より提示した2つの方向性（A案・B案）について検討した結果、「B案：第1回サミットの進め方の発表」とすることで合意が得られた。意見交換においては、実践の場は、参加者である若者が主体となり、自由に発想を広げて話し合える場とすることが何より重要であり、そのためのプログラムや進め方を検討していく必要があるとの意見が挙げられた。

（主な意見）

- ・ A案のように「課題解決に向けた方策」まで検討するのは厳しい気がする。B案の「第1回の進め方」といったときには当然テーマを発表するわけだろうから、なぜそういうテーマを作りあげたのか、その背景となることを踏まえて発表すればいいのではないかと思う。「こういうテーマにしました」というだけではシンプルすぎて面白くないだろうから、それに至るまでの背景、バックグラウンドもいろいろと発表してもらい、「こういうディスカッションをした」ということも発表し

てもらえばいいのかなという気はする。

- ・今回については2年連続参加できる方ということで、「来年も実施するので、そこまで参加できる人」という条件付けにするのがいいかもしれない。
- ・例えばB案だと、第1回目のサミットの進め方を自分自身で考えて「コンテストをやりましょう」「パネルディスカッションやりましょう」という提案をする場合には、来年度以降に自分たちであれば何を発表するかということも意識して、議論が行われるのかなという気がしている。そういう意味では「今回議論して、自分たちで考えた企画だ」というところが来年度以降に自発的に参加するメリットにはつながるのかなと思う。
- ・ストーリーを作って「演者は若者ですよ」というふうに若者を操ることは絶対にしてはいけない。そうしないために何ができると考えると、一番大きいのは「自分が主人公なんだ」と思えるようなレディネスを作っていけるかだと思っている。
- ・B案で、例えば全国コンテストを開催するとした場合、優勝した場合に賞金や実際の企業での販売・取り組みの実施なども議論に上がってくる可能性がある。こうした検討を行うことが来年度以降再度参加する1つのインセンティブになるのではないかと。また、例えばポスターセッションやパネルディスカッションを開催すると学生が決めるのであれば、復興庁等に対し政策提案をしてもらおうというのが、第1回、第2回と続いていったときのゴールになるのではないかと。また、例えば産業のようなテーマだと、学生として携わったことが現実社会に反映されるということが1つのメリットになる可能性があり、学生の提案に対して参加する団体や協賛団体がどれだけの支援をできるのかということがインセンティブとなるのではないかと。
- ・少し昔の研究に、なぜ大学の学園祭は成り立つのかというものがあつた。「これをやったらいいよ」というのは一切なく、「これとこれはやっちゃダメ」というネガティブリストしか提示しないことが重要な点。今回はそれに近い方法で提示してみてもどうか。前半に「浜通りからこういった方をゲストでお呼びしました」「我々が考えている内容はこうです」ということを伝えて、後半はネガティブリストを前提に話し合ってもらおう。「全国だけでなく世界を見据えた、若者だけで話し合えるようなJヴィレッジという場所にもっていくんだ、その創設メンバーなんだ!」ということが一種のモチベーションになるのではないかと。
- ・実践の場で若者に本気で考えてもらった企画については実現するぐらいのことまで言えればよいのではないかと。
- ・今回の「新しい東北」官民連携推進協議会で立ち上げようとするのなら、B案で「テーマはありません」というのが面白さの1つになるのではないかと。ただ、テーマはないと言いつつも、初日の浜通りの視察や地元のゲストに誰を呼ぶかというところでかなり引っ張られてしまうことはあるかなと思っている。「大人たちが考えたこのテーマについてみんなで考えてみよう」というのはできれば避けたい。
- ・テーマがないというよりは、「テーマは君たちの中にある」という言い方なのであろう。
- ・一度ではなく2年という時間をかけながら進めていくのがよいのではないかと。参加した学生がしっかりと議論をして、「新しい色々なアイデアは、どれも間違いではない」という会の雰囲気でも話が進められるように我々がすることで、新しい福島を「こうしていった方がいい」という斬新なアイデアも出てくるのかなと感じた。

(2) 実践の場の内容案（招待する参加者及び募集方法）に関する検討

実践の場に招待する参加者は、22歳くらいまでの学生および社会人とし、内訳は、県内の学生6名（福島大学に限定せず）、県外の大学生3名、社会人3名を目標として声掛けをしていくことで合意が得られた。意見交換においては、できるだけ広く様々な若者の意見を聞くことができる場とするべく、福島の復興に関心のある若者であれば県外からの参加も歓迎すべきという意見や、社会人には学

生とは違った視点が期待できるといった意見が挙げられた。

(主な意見)

- ・本県には医科大を除いて県立大学も会津大学や短大があって、短大の学生たちは結構地元就職することが多い。この地域において、ここで生きていこうという人たちが決めていく、参画していくのが望ましいのではないかと。
- ・県内の社会人として、これからは福島で家庭を持ったり、子供を持ったり、歳をとっていく、又はそうしたい、という人たちに参加いただくべきではないかと。
- ・潜在的な可能性として、県外の学生でも福島に興味がある人が結構いる。例えば、立命館大学の生徒が浜通りに根付いて事業をしているというケースがいくつも見られたりするので、そういうことを前提に、県外の学生も対象にした方がいいのかなと思った。
- ・県内は、やはり実際に会津短期大学の学生などが川内村の授業や体操などを通して子供たちや高齢者と関わるようなことをやっているの、総合大学だけでなく、短期大学や専門学校の学生も含めた方がいいのかなという気がする。
- ・大学生は県内に絞る必要は全くないと思う。社会人が入ることで、大学生の良さが引き出されなくなってしまうのではないかと懸念がある。大学生の自由な発想を尊重したいと思う。
- ・基本的にはできるだけ広く、色々な意見が聞けたらいいと思う。ただ、県外の企業はそこまで要らない感じがする。社会人と言ったときにはどういう社会人なのか。大学生と同じ年代の18～22、23歳くらいで、高校を出て働いている人もいる。そういう人と、社会人と言っても30歳とか少し経験を積んでいる人とは、だいぶ違うと思う。県内の社会人と言ったときに、大学生と同じような年齢で、被災地域で色々な団体で活動をしている人もたくさんいるので、そういう人に入っても良かったらいいかなと思う。
- ・社会に出てから、今までと変わった考え方を持っている方が多く見受けられたというのが、二十数年働いてきた中で感じるころだ。18～19歳で、高校を卒業して社会人1～2年経ってまったく考え方が変わってきていると、もしかしたら大学生よりいい発想を持っている可能性があるのかなと思う。
- ・県内・県外問わず、福島に思いを寄せる大学生が集まってくればそれが一番いいかなと考えている。ただ、学生の皆さんが人生経験がある社会人の意見に誘導されたり、影響を受けたりする可能性もあるかなとも感じている。
- ・福島県で包括連携協定を結んでいる大学以外にも関わりがある大学はたくさんあり、少なくとも福島県の復興に関して興味関心があって、少なからず携わりたいと思ってくださる意識の高い学生さんが多いと感じている。
- ・自分で社会人として働いていると、これからの福島県をどうしようかと考えたときに、学生とはちよっと視点が違うのかなと思う。もしかするといいことを言うのではないかと気がする。このため、社会人も参加いただくべきではないかと。

(3) 実践の場の内容案(視察を行う施設・ルート)についての検討

プログラムの1日目に行う浜通りの視察について、東日本大震災・原子力災害伝承館、中間貯蔵施設、檜葉町の天神岬等の案が挙げられた。また、視察に当たっては、単に見て終わりではなく自分に引き寄せて考えることができるよう、事前にオリエンテーションを行い、事象だけでなく構造的に見るといった「見方」を伝えることが重要だとの意見が挙げられた。

(主な意見)

- ・双葉の伝承館や中間貯蔵施設もいいが、檜葉の天神岬みたいな、福島の海が見えて広野の火発や第

二原発が見える、そういうところで福島の良さも見てほしい感じもある。

- ・福島現在の姿として、気持ちのいい景色を見させることも大事だ。来られなくなったこともあったが、今再び来られるようになったという事実。「暮らしが奪われたのだ」という本当の事実と、「あの日のままではないぞ」というふるさとを諦めない人たちの想いにも触れさせたい。視察はすごく大事だと思う。モチベーションにつながる。
- ・伝承施設などから何を読み取るのかという見方、つまり構造的に見るということが大切である。例えば被災したペットボトルがあった場合、それを単に見るだけでなく、誰が持っていたのか、どこで誰と買ったのかといった、その向こう側にいる人や暮らしを想起させることが大切だ。短時間でいいので、視察前のオリエンテーションをしっかりと行うべきである。
- ・語り部の話はいいかもかもしれない。津波の話では、請戸小学校という震災遺構があって、そこには実際に避難した様子などが物語的に展示されている。見ていてもグッとくるものがあるかもしれない。
- ・請戸小学校の2階に旧浪江町の模型があり、そこには「〇〇さんの畑。ここでは豆を植えた」というようなものがいっぱい刺さっている。それを見て小学校の子供たちが、「震災は浪江で起きたんじゃないんだな。浪江の人たちの暮らしに起きたんだな」ということを言った。見方をきちんと伝えておくと、小学生だって自分のふるさとがこれからどうなっていくのかというところまで引き寄せて考えることができる。価値の押し付けではなく、構造的に見ること、事象だけで捉えないといったことをきちんと伝えておく必要があると思う。

(4) スケジュールについて

事務局より示したスケジュール案について特段の意見は示されず、参加団体の合意が得られた。

5 閉会

記者発表の内容、これに伴う実践の場での議論内容については、「B案：第1回のサミットの進め方の発表」で進めることで合意が得られた。招待する若者は、県内の社会人3名、県内の学生6名（福島大学2名、その他の大学4名）、県外の大学生3名ということで合意を得、主団体・副代表団体の協力を得ながら声掛けを進めることとした。また、今回の議論を踏まえて、視察の内容について事務局において検討を進めることとした。

以上